続 徒然つれづれ No. 306

地域社会のもろもろ

桑野　巍

横浜市在住の友人から便りをもらった。彼は若い頃から働き者で、じっとしているのが嫌いな性格だったことを思い出した。会社を定年退職して以降地域の世話役や同窓会の幹事役をこなし“役立つ人力”を発揮していた。ところが、孫が小学校に入学したころから地域の世話役を断り、いま“辻立ち”のボランティアに励んでいる。

彼の手紙は孫が可愛い、近所の子どもたちも愛らしい、と訴える。次代を背負ってくれると思うのは年のせいからなのだろうかといい、このところ各地で起こる陰惨な事件をみて２年ほど前から毎朝通学路に立ち、声をかけて見送っている。初めのうちは子どものお母さんたちも当然のこととして協力していたが、その後一週間経ち10日経つうちにお母さんたちはもう知らん顔、いま老人会が協力してくれている、と溜息混じりだ。

そして「最も防犯意識が薄いのは世の若い母親だ。変質者が付近をうろついているというのに」と嘆く。いま必要なのは現在の子どもたちの親の教育、と訴え、まだ遊びたい親、パートの名目に出歩きたい親が多く、その陰で子どもは放任されている。これぞ戦後教育の結果で、日本民族の変質にあきれかえり「意見を聞かせてほしい。返事を待つ」というのだ。世情を感じとる彼の顔が目に浮かんだ。

便りをもらったらできるだけ早く返事を書く主義なのに今回はなぜか筆が進め難い。まだまだ沢山のエネルギーを持ち合わせている友人の行動に「脱帽もの、尊敬するよ」と書き出したがあとが続かない。締めくくりは「どうぞ元気で地域社会のために、家族のためにご活躍を」と書こう―はわかっているが、感想、意見となれば身構えてしまう。変質者撲滅論、親や子どもの再教育論、しつけ論、物の豊かさ・心の荒み論、刑の軽さ、メディアの過熱報道論などが入り組んで、不精者はまだ返信をしたためてない。

それは自分自身がいつの間にか自己中心主義の波に呑み込まれ、気まぐれプラス勝手な生き方しかできなくなっているからだろうか。誠実さだけは失っていないつもりだし「人を大切に」の精神も持ち合わせているのに情けない現象が起きているのだ。

今冬は新型インフルエンザが世界的に流行するとの報道を耳にしても、注射嫌いで予防接種を受けることさえ面倒がっているのだから、横着者も気恥ずかしい。それでも気象庁や気象協会の日本列島の今冬長期予報が全く裏返しの異常寒波には「高度科学技術の時代に何たる予測ぞ」と腹を立て、批判をしているのだから「変な愚かな大人」を反省している。

気がつくと身の回りの変化は目まぐるしい。気象だけではなく、地球環境や資源の大量消費、人心の乱れなど、どれも問題は深刻さを増している。思い直し、見直しが必要な時代に入ったのだ。われわれの生活の土台が大きく揺さぶられているのに住民たちは「暮らしはもっと便利で豊かがいい。もっともっとよくなりたい」の要望が強いのだから我儘（わがまま）だ。

そこで思い起こすのは先人たちの英知というか知恵である。先人たちが苦難を重ねて築いてきた教えが壊されてないか、に突き当たった。おじいちゃんやおばあちゃんの知恵の中には「雨水を貯めて植木の水やり」「だしがらに少し手を加え佃煮に」「ふろしきで買い物袋の無駄もなし」などがあり、使い捨て時代のいまこそ昔ながらの暮らしのアイデアがある。物を大切にする思想はわれわれが引き継がずして誰がやる―を教えてくれる。

ところが農山村では古い人も若人も年々減少気味だ。墓参りのため年２回程度故郷へ向かうが、古老の一人は「もう若い人とは意見が合わない。村の寄り合いもほとんどない。たまにあっても饅頭を食べ、渋茶を飲んでも沈黙の時が続くだけで定例の寄り合いは中断に追いやられた。これでは鎮守様のお祭りもなくなるかも」といい、寂しい思いだ。それでも地域人たちは古老たちの知恵を何とか吸収し、それを生かすだろうが、寄り合い縮小はわびしい。

大都市に住む友人の便りは自分流の生き方、自己中心主義、少子高齢化、事件だけでなく地域社会のもろもろを考えさせてくれた。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）